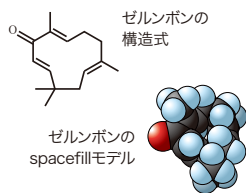


ハナショウガ(*Zingiber zerumbet* Smith、**「花生姜」**)はショウガ属、ショウガ科に属する。熱帯から亜熱帯地方で広く見られ、一般名で **Wild ginger** として呼ばれている。また、その特徴から **Bitter ginger** (**ニガショウガ**、「苦生姜」、**Shampoo ginger** (**シャンプージンジャー**)と呼ばれているところもある。日本国内では沖縄県西表島の農家で自家栽培が行われていることが分かっているが、最近では高知県でも大量に栽培できることが明らかとなっている。

根茎部の形状は通常の食用ショウガとほとんど見分けがつかないが、ニガショウガというだけあって非常に苦い。それもそのはず、ハナショウガのもつ精油構成成分は、食用ショウガのそれとは全く異なるのである。しか

し、文献によるとアジアの郷土料理に時折使用されていたと記されている(Exotic Tropicals of Hawaii; ISBN 0-916630-78-1)。

ハナショウガの精油主成分は**ゼルンボン**といい、精油中の80~90%を占める。含有重量は季節によって異なるが、根茎部の乾燥重量あたり3~4%も存在することが分かった。



ハナショウガの花(西表島)

ゼルンボンの将来性と

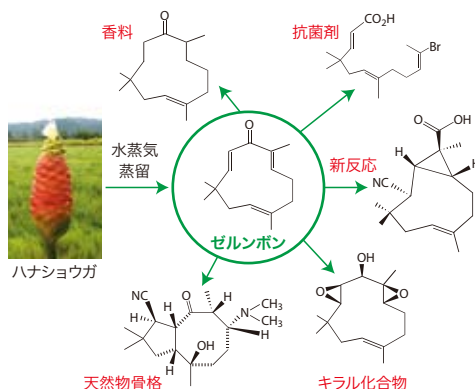
「ハナショウガ研究会」

近年、京都大学農学部の大東肇名誉教授・村上明助教授によるゼルンボンの生理機能の研究によって、がんに関係するEBウイルスの抑制作用、抗炎症作用、生体防御・解毒酵素の誘導作用が発見され、ゼルンボンは今後の展開が大いに期待される機能をもつことが分かってきた。また、ゼルンボンは化学的な反応性が高く、全く異なった形に姿を変える手法が近畿大学農学部の北山らによって数多く開発され、骨格を変えた化合物は、香料や抗菌剤、あるいは抗がん剤などへの応用が期待されている。また、大阪大学基礎工学部の高谷光助教はこれら反応を計算化学的に解

明するアプローチを行っている。監修者の一人である伊藤氏も生薬の専門家として参画し、現在はここでは紹介しきれないメンバーが集まって、ハナショウガの心を聞きだそうと向き合っている。ところで、なぜハナショウガはゼルンボンを大量に産生する必要があったのであろうか。興味は尽きることがない。

このように多様性に富んだハナショウガおよびゼルンボンを、360度の角度から眺めようという発想で、2006年に「ハナショウガ研究会」が沢田誠二氏(京都教育大学名誉教授)を会長、宮脇英昭氏(大洋香料(株)社長)を副会長、北山を幹事として発足した。この研究会では植物の機能と、大量含有成分ゼルンボンの反応多様性および生理活性について、多角的に研究する。また、地球上にある同様の性質をもった植物の発掘も視野に入れ、枯渇する化石資源を多数の植物成分で置き換えたいという夢をもった研究会である(<http://www.geocities.jp/zerumbone/>)。

本書にある生薬は、植物が作り出す物質と、その生理機能に重点がおかれている。植物は何らかの目的をもって様々な物質を産生するが、人類が上手にこれらを活用できれば、化石資源に頼らず、植物と共生する素晴らしい社会ができるのではないだろうか。



ハナショウガ